

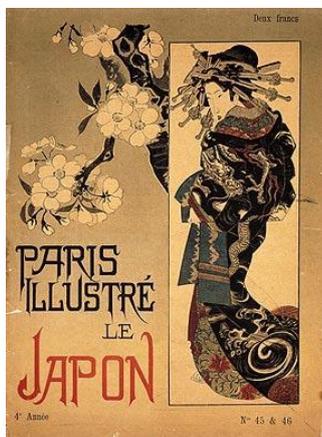
パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

191 パリ・イリュストレ 日本特集号（2023年9月5日）

リヨンにある印刷博物館では、印刷物の歴史や印刷技術の発展を紹介する展示をしています。展示品の中で、パリ・イリュストレの1886年5月号の日本特集の表紙を見つけました（写真右）。パリ・イリュストレとは、1873年から1920年までフランスで発行された挿絵入りの雑誌です。1886年5月には日本特集号が生まれ、パリで活躍していた美術商の林忠正が日本について20ページを超える文章を書きました。



表紙には、喜多川歌麿による浮世絵「江戸の花浄瑠璃娘」が用いられています。特集号にはカバー表紙もあり、こちらには溪斎英泉作の浮世絵「雲龍打掛の花魁」が使われました（写真左下）。これを模写して、フィンセント・ファン・ゴッホが、1887年に「ジャポネズリー花魁」を描いたことは有名です（中央下）。アムステルダムにあるゴッホ美術館には、ゴッホが英泉の浮世絵を写し取った紙が残されています（写真右下）。



© Van Gogh Museum, Amsterdam
(Vincent van Gogh Foundation)

日本特集号に掲載された林忠正の文章は、フランス語で初めて日本について包括的に説明したものでした。この特集号の全体は、フランス国立図書館の電子図書館ガリカで閲覧することができます。内容は、日本の歴史、気候風土、大名社会、ハラキリ、日本人の性格、宗教、教育、住居、衣服、食事、結婚、劇場と観劇、日本美術の13項目に分かれています。随所に浮世絵やイラストが挿入され、これらの絵も当時の日本を理解する助けになっています。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

この号が発刊された 1886 年は、日本では徳川家の将軍が実権を支配していた江戸時代から、明治という天皇を中心とする新しい国家体制に移行して 20 年余りが経った頃です。明治時代になって、近代国家に向けて日本の社会は大きく変化しました。林忠正は、当時の日本を理解させるために、江戸時代の習慣も記述しました。本文の中から、現在とは異なる日本の様子をいくつかご紹介します。

大名社会の項で、忠正は、大名とその下の侍が支配していた社会構造を説明した上で、当時は旧武士階級が政府の役人となり、革新的なグループを構成して文化を牽引していると述べています。また、ハラキリの項を設けて、切腹とは高貴な人物の厳粛な行為であると説明し、そのやり方を記述しました。明治時代になって、制度上の武士はいなくなりましたが、ある日を境に世の中が一変したわけではありません。忠正の文章から、江戸時代は武士であった人たちが、新たな時代に相応しい国造りを行っていたことを伺い知ることができます。

日本人の性格の項では、忠正は、日本人に共通する点として、愛国心、親孝行、家に対する忠誠、礼儀、忍耐、秩序、清潔、芸術観を挙げています。また、日本人は自尊心が高く、与えられたミッションは、命をかけてもやり遂げ、その性格は悪人の中にもあるとして、次のようなエピソードを書いています。1879 年に江戸で大火事が発生した際、刑務所の所長が扉を開けて、囚人たちに対して、「今夜はお前たちの命を助けるために自由にするが、明朝にはここに戻ることを約束しなさい。」と言い、翌日には全員刑務所へ戻って来たという話です。現代の感覚では信じられないような話ですが、身分制度があった時代には、それぞれの立場に相応しい行動をすることが当然のことであったのかもしれない。

忠正が残した文章は、130 年以上前の日本人の行動や考え方を知る貴重な史料になっています。

※博物館の展示は、変更される可能性があります。